

へありのままに見るゝのは困難

認知行動療法という心理療法があり暇を見つけては取組んでいます。ストレスを感じると私たちは悲観的に考えがちになって、問題解決できない心の状態に自分を追い込んでいきます。簡単に言うと、私たちは物事をありのままに見ることができず、歪んで見てしまいうから苦しんだり、傷ついているということなのです。お釈迦さまも同じことをおっしゃっているのです。「人生は苦である。でもその苦はありのままに見えないから苦しい」と。それでは、ありのままに見ればこの苦しみは晴れるのかと、ありのままに見ようとすればするほど、それがいかに難しいかに気づくのです。

千葉県南房総市 勝善寺

住職 井上 孝昌 先生
たかまさ



親鸞聖人報恩講ご法話

講題…私にとって親鸞聖人とは
しんらんしょうにん

二〇二二年十一月七日(火)

報恩講は私たちにたちひとりひとりが教として最も大切な仏事えにであう仏さまのおとして、真英寺では四仕事を言います。親鸞〇〇年以上もいかなる聖人をご縁にして教えことがあっても勤めてにであうこれが報恩講でまいりました。仏事です。ここでは、当日のは亡くなった方をご縁ご法話のダイジェストにして、今を生きる私版を掲載いたします。

◆ききようしき 帰敬式は第二の人生が始まるめでたい日

しんらんしょうにん 私たちの宗祖・親鸞聖人は九歳のときに僧籍を頂戴する得度を受けて法名を授かり、それからずっと亡くなるまで僧侶として生活していったわけです。得度とは異なりますが、本日は報恩講に先立ち帰敬式が執り行われ、四名の方が受式なさり法名を授かりました。まことにおめでとうございます。
ききようしき 帰敬式を受式されて法名をいただいたということは仏さまのお弟子になられたとい

うことであります。実感はございますか。

儀式を行ってその場に身を置くということ
ぶつでし で「私は仏弟子(仏のお弟子)となったのだ」と、そういう自覚は生まれるのではないかなと思います。

もう今までとは違うのです。第二の人生がじつは今日始まった、そういう大変めたい日であります。自分で思うように思うか、思わないかは関係なく事実としてそうなっているのです。

ききようしき 帰敬式では住職が「南無阿弥陀仏・南無
なむあみだぶつ

あみだぶつ
阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」と三度お念仏しながら剃刀を三回頭に当てていました。これはどういうことかと言いますと、昔は頭のとっぺんで髪の毛を結ゆっていましたね。それを髻もじりと言います。三回剃刀の刃を当てることで三つの髻を切り落とすということをあらわしております。

◆私たちが持つ三つの髻とは？

〈一つ目の髻〉

自分はいままでどのように生きてきたのかなどいうことを考えていただくとわかりますが、人からよく思われたいという気持ちはありませんか。やはり人の目は気になりますね。「あの人は何をやっているんだ」と後ろ指さされるような真似まねだけはしたくないし、子どもや孫にそういうことはしちゃだめよと教えていると思います。このように私はずっと生きてきたわけです。一つ目の髻もじりが「人からよく思われたいという心」です。

〈二つ目の髻〉

みなさんは物やお金はほどほどにあって満足しているのだろうと思います。けれども、

若さが欲しいとか、健康になりたいとか、もつとこうなったらいいなということはありませんか。私にはそういうものがたくさんありますね。欲さかが盛んだと言えると思います。よく「私は物欲がないので欲はない」という方がいらっしゃいますが物欲だけが欲ではありません。二つ目の髻もじりが「欲」です。

〈三つ目の髻〉

二人で話し合いをしていると相手に負けたくないという気持ちはありませんか。「あなたより私の方が知っているんだよ、正しいことを言っているんだよ」自分を下にしないように、自分が相手よりも常に上に立ちたいという気持ちありませんか。きちんとした討論というのは、本当のことを討論によって導き出すという意味があるので、私の場合には「相手に絶対勝つてやるぞ、言い負かされないぞ」という言い合いが多いですね。連れ合いとは討論にならずに言い合いになってしまいます。どうでしょうか。言い合いには発展しなくても、言い負かされたフリをしてその場をやり過ごすということもあります

が、でも心の中には「おれの方が上だ」という気持ちが残りますね。そうやって私はずっと人より勝っていると思って生きてきたわけです。

◆髻を切り落とすという儀式の意味

帰敬式ききょうしきのときに剃刀で切り落としたのは今言ったような三つの髻もじりです。どうでしょう、三つの髻は消えて無くなりましたか。切り落としたという儀式が大事です。ところがこのような歌があります。

折れてみて

初めて見えた

鬼の角つの

折れた思いが

また角つのになり

念仏詩人 浅田正作

この場合の鬼とはいったい誰のことでしょう。帰敬式ききょうしきでは儀式として、一旦そのような三つの髻もじり（名誉を求める心・欲ばりな心・人より勝っていたい心）を切り落としたのです。切り落としたということは「今まではそ

ういう心に縛られて生きていた、その縛られた生き方は本当の生き方ではありません。あなたのエゴイズム（自我）を満たす生き方ではないかもしれません」ということを自覚する意味があるのです。切り落とすという儀式を通して、私たちはそれらを自覚するのです。

ところが先ほどの歌にあったように「折れた思いが また角になり」なのです。報恩講が終わってご自宅へ帰ると家族やいろいろな人と向き合うことになると思います。その途端に、また角が生えてくるのです。角というのはエゴイズム（自我）ですね。生えてきたら「ああ、また角が生えてきたなあ。私はエゴイズムだったなあ」と気づいて原点に帰ってまた歩み出すのです。

実は宗祖・親鸞聖人という方は九十年間そのような人生を歩まれた方なのです。名誉や利益や人の上に立ちたいという気持ちが親鸞聖人の中に無くなったわけではないのです。それをずっと持ち続けて「ああ折れた角がまた生えてきた」と言って生涯を生きられました。それが浄土真宗のすくいなのです。

◆私にとって親鸞聖人とは

今日一番お伝えしたいのは今言ったことです。折れた角がまた生えてきた。ハッと気づいたらまた角が折れるわけです。生活していくと人間関係の中でまた角がムクムクと生えてくる。これを念仏生活というのです。真英寺の掲示板にこのような言葉ありました。

念仏してたすかるのではなく

念仏がたすかった証拠です

南無阿弥陀仏と念仏することを自分が助かる道具にするのではないのです。念仏したら助かるということではないのです。これには驚きませんか。なかなかそのようにはつきりとは言いません。念仏して助かるんだというけれど、念仏したら助かるのではありません。言い回しの微妙な違いですけれど、大きな違いなのです。念仏して助かるのではなく、念仏で助かるのです。南無阿弥陀仏と出たところに私たちのすくいがあるのです。

「私はエゴイズムだったなあ」と気づかせてもらったところがすくいと言いました。私に

そのことを気づかせたはたらきを阿弥陀さんというのです。また南無阿弥陀仏と言ってもいいと思います。阿弥陀さんによって気づかされたのです。

それは私たちの言葉で言えば「あんたしようがないねえ」でしょうか。「あんたしようがないねえ」と言ったときには、あなたのことはわかったよと、赦しているのです。それは認めてくれているのです。認めてくれているわけだから、私の場合は涙が出てくるのです。エゴイズムな自分自身を素直に受け入れられて頭が下がるのです。私が悪かったと頭が下がるのです。その繰り返しの一生涯が「念仏生活」、浄土真宗のすくいなのです。（文責：真英寺）

YouTube 真英寺法話チャンネル

当日の井上先生のご法話をお聞きになりたい方は
下記QRコードからスマホ等でご覧いただけます。



<https://youtu.be/4hKIWKGrVNo>



真英寺 報恩講

検索

宗祖 親鸞聖人
報恩講 2022



井上 孝昌 師
勝善寺住職
(千葉県南房総市)



ご法話テーマ
私にとって
親鸞聖人とは？



お寺の掲示板

念仏してたすかるのではなく

念仏がたすかった証拠です

井上先生が法話の中で取り上げた言葉を改めて。

じつはこの言葉、真英寺本堂の黒板にずっと掲示してあって、井上先生が二〇二二年の報恩講へお参りした際に偶然見つけて取り上げてくださいました。

みなさんはこの言葉を読んでどのように感じるでしょうか。「念仏すればたすかる」のであれば同じ意味ではないかと思うかもしれませんが、ここには日本語的にも微妙な意味の違いがあります。難しい言葉は一つもないのに、解釈に戸惑われるのではないのでしょうか。

前者の「念仏してたすかる」のであれば、念仏は溺れている人にとっての救命具と同じように自分を助けるための道具でしかありません。しかし後者「念仏がたすかった証拠」という言葉は「南無阿弥陀仏」と自分の口から念仏が出たという事実がまず先にあります。その念仏が出た事実の裏側にある無限の背景に目が向けられているのです。

みなさんは念仏が「ありがたいな」と思うでしょうか。そのような人はあまりいないと思います。そのようにありがたいとも思えない念仏が自分の口から出る。考えてみれば不思議なことです。念仏が出たという不思議なできごとの裏側には、じつは無数の念仏してたすかっていった人たちがいるのです。

令和6年(2024年)年回表

1周忌	令和5年(2023)
3回忌	令和4年(2022)
7回忌	平成30年(2016)
13回忌	平成24年(2012)
17回忌	平成20年(2008)
23回忌	平成14年(2002)
27回忌	平成10年(1998)
33回忌	平成4年(1992)
37回忌	昭和63年(1988)
43回忌	昭和57年(1982)
47回忌	昭和53年(1978)
50回忌	昭和50年(1975)

副住職が東京教区の

報恩講・通夜説教でお話します

二〇二四年一月二十六日から二十八日に東京教区報恩講が厳修されます。このたび一月二十七日の若手通夜説教で副住職が法話をする事になりました。応援の意味でもお参りいただけると、とても心強いです。ご興味あるという方はお問合せください。

詳しくはこちら↓



2024年 年間行事予定表

1月2日(火) 14時	修正会 しゆしょうえ
3月17日(日) 14時	春彼岸会法要 ひがんえ
7月7日(日) 14時	お盆のつどい ひがんえ
9月23日(月) 14時	秋彼岸会法要 ほうおんこう
11月7日(水) 14時	報恩講

眞英寺寺報「慈現」第八号

発行 眞英寺 (眞宗大谷派 京都東本願寺)

東京都新宿区若葉二丁目一番三

TEL 03-3351-5955

E-mail m-miura@seneji.jp

URL <https://www.seneji.jp/>

